ビデオ通話時の抵抗感に対して性格が及ぼす影響

心理学科　18hp249　馬場 玲音
(指導教員：長野 祐一郎)

キーボード：オンラインコミュニケーション, 主要5因子性格検査

序と目的

新型コロナウイルスの影響により3密を回避するために、社会ではテレワークなどのオンラインによる就業形態に変更を余儀なくされた。そして、就業形態だけでなく大学の講義や就職活動においてもオンラインで実施された。しかし、テレワークなどのオンラインコミュニケーションには対人コミュニケーションと違った難しさがある。そのオンラインコミュニケーションに伴う心理的な問題を明らかにする必要があるだろう。人格とコミュニケーションの関係については、藤本ら(2007)では、外向性が高く、神経症傾向が低い人ほどコミュニケーション能力が優れていることから性格特性とコミュニケーション能力は深く関連していることがわかっている。本研究では、性格を形成する神経症傾向性、外向性、開放性、調和性、誠実性である5つの要素をまとめて検査することのできる主要5因子性格検査を用いて性格を測定する。以上を踏まえて、本研究ではオンラインコミュニケーションおける抵抗感に対して性格が及ぼす影響について検討するものである。

方法

実験参加者：60名の大学生を対象とした。平均年齢は19.1歳(SD=1.52)であった。

指標：性格を測定するために下仲・中里・権藤・高山(2011)が作成した主要5因子性格検査のNEO FFIを用いた。この質問紙は神経症傾向性、外向性、開放性、調和性、誠実性の5因子で構成されており、質問項目数は60項目であった。実験参加者には“非常にそうだ”から“全くそうでない”の5件法で回答してもらった。オンラインコミュニケーション時の抵抗感を測定するために、表1に示される独自尺度3項目を利用し、“非常に感じる”から“全く感じない”の5件法で回答してもらった。そして、そのように感じる理由を自由記述で回答してもらった。

手続き：この実験ではすべてweb上で行った。実験参加者を3つのグループに分けて実験に参加してもらった。独自項目の順序を入れ替えて回答してもらうことによりカウンターバランスした。まずNEO FFIを回答してもらいその後に独自項目と自由記述を回答してもらった。

結果

各人格の得点が高い10名を高群、低い10名を低群とした。抵抗感を従属変数とし、2群(高,低)×3条件(オンライン,友人,家族)の混合計画による分散分析を行った。その結果、群の主効果が有意であったのは神経症傾向のみであり、交互作用は外向性のみ有意傾向であった。条件の主効果が有意であったためHolm法による多重比較を行った結果、どの性格においてもオンライン条件と友人・家族条件との間は有意であった(いずれもp<.05)。

考察

本研究では、オンラインコミュニケーションおける抵抗感に対して性格が及ぼす影響について検討するものであった。その結果、群の主効果は神経症傾向のみ有意であった。条件の主効果は、どの性格でも有意であった。

神経症傾向と外向性がオンラインコミュニケーションの抵抗感に影響を与えていることが示された。神経症傾向は不安や心配といった不安定性が抵抗感を増加させたと考えられる。外向性では、不特定多数の他者の目に自身の姿が晒されるため、身だしなみや会話などに気を使う結果としてオンラインで高くなったと考えられた。今後は、実際に対面での会話・ビデオ通話の会話を行ってもらい性格検査と抵抗感の有無、内省報告を回答してもらい同様の結果が得られるかを調査すべきだと考えられる。

表1.独自尺度の質問項目

1.オンライン授業の顔出しに抵抗感を感じる。
2.友人とのビデオ通話に抵抗感を感じる。
3.家族間のビデオ通話に抵抗感を感じる。

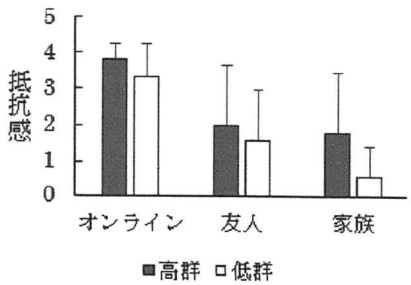

図1 神経症傾向による抵抗感の違い

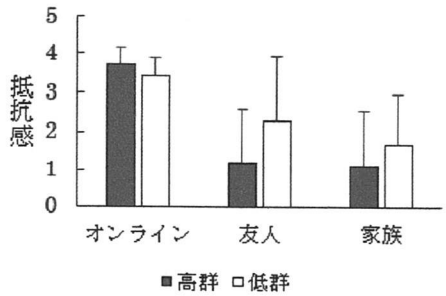

図2 外向性による抵抗感の違い

ビデオ通話時の抵抗感に対して性格が及ぼす影響

学籍番号：18hp249
氏名：馬場 玲音
指導教員：長野 祐一郎

序と目的

【新型コロナウイルスの影響で変わった社会生活】

新型コロナウイルスの影響により3密を回避するために、社会ではテレワークなどのオンラインによる就業形態に変更を余儀なくされた。そして、就業形態だけでなく大学の講義や就職活動においてもオンラインで実施された。2019年12月のテレワークの普及率は全国で10.3%だったものが2020年12月では21.5%に上昇していた(内閣府,2020)。しかし、テレワークなどのオンラインコミュニケーションには対人コミュニケーションと違った難しさがある。そのオンラインコミュニケーションに伴う心理的な問題を明らかにする必要があるだろう。

【人格とコミュニケーション】

人格とコミュニケーションの関係については、藤本ら(2007)では、外向性が高く、神経症傾向が低い人ほどコミュニケーション能力が優れていることから性格特性とコミュニケーション能力は深く関連していることがわかっている。藤本ら(2007)の結果から、外向性は表現力および自己主張などに影響を及ぼしていることがわかっている。さらに、神経症傾向は対人スキルの関係調整能力に影響を及ぼしていることもわかっている。畑野(2010)では、コミュニケーションに対する自信とアイデンティティには関連があるのかを調べられており、その結果コミュニケーションに対する自信とアイデンティティには関連があることが分かっており、意思伝達に関しては中核的同一性とも関連が見られた。本研究では、性格を形成する神経症傾向性、外向性、開放性、調和性、誠実性である5つの要素をまとめて検査することのできる主要5因子性格検査を用いて性格を測定する。

【本研究の目的】

本研究では、様々な性格の影響を探索的に調べるために、主要5因子性格検査を用いる。以上を踏まえて、本研究ではオンラインコミュニケーションおける抵抗感に対して性格が及ぼす影響について検討するものである。

方法

実験参加者

60名の大学生を対象とした。平均年齢は19.1歳(*SD*=1.52)であった。

指標

性格を測定するために下仲・中里・権藤・高山(2011)が作成した主要5因子性格検査のNEO FFIを用いた。この質問紙は神経症傾向性、外向性、開放性、調和性、誠実性の5因子で構成されている。質問項目数は60項目で、1つの因子を12項目で評定する。実験参加者には“非常にそうだ”から“全くそうでない”の5件法で回答してもらった。

抵抗感を測定するために、表1に示される独自尺度3項目を利用し、“非常に感じ

る”から“全く感じない”の5件法で回答してもらった。そして、そのように感じる理由を自由記述で回答してもらった。

表1. 独自尺度の質問項目

1. オンライン授業の顔出しに抵抗感を感じる。
2. 友人とのビデオ通話に抵抗感を感じる。
3. 家族間のビデオ通話に抵抗感を感じる。

手続き

この実験ではすべてweb上で行った。実験参加者を3つのグループに分けて実験に参加してもらった。独自項目の順序を、グループ間で入れ替えて回答してもらうことによりカウンターバランスした。まずNEO FFIを回答してもらいその後に独自項目と自由記述を回答してもらった。

結果

神経症傾向について神経症傾向の高い10名を高群、神経症傾向の低い10名を低群の2群に分け、平均値と標準偏差を算出した。縦軸を抵抗感、横軸を各条件(オンライン授業、友人、家族)としてグラフを作成した(図1)。また、エラーバーは標準偏差を示した。

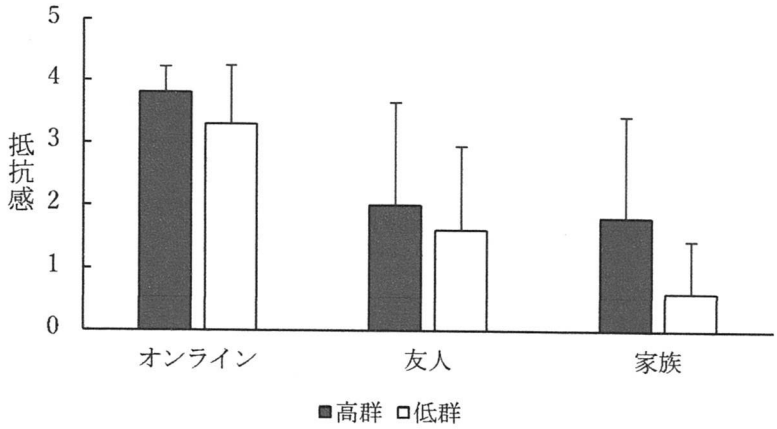

図1 神経症傾向の群ごとの条件による抵抗感

図1からどの条件においても神経症傾向高群の抵抗感は神経症傾向低群の抵抗感を上回っていた。神経症傾向高群はオンライン条件がもっとも抵抗感を高く、友人条件と家族条件では大きな差は見られなかった。神経症傾向低群はオンライン条件がもっとも抵抗感を高く、友人条件よりも家族条件の方が抵抗感は低くなった。

抵抗感を従属変数とし、2(群:神経症傾向高群/神経症傾向低群)×3(条件:オンライン/友人/家族)の混合計画による分散分析を行った。その結果、群の主効果は有意傾向であった($F(1,18)=3.45, p<.10$)。条件の主効果は有意であった($F(2,36)=25.68, p<.01$)。群×条件の交互作用は有意ではなかった($F(2,36)=0.82$, *n.s.*)。条件の主効果が有意であったため Holm 法による多重比較を行ったところ、オンライン条件と友人条件・家族条件との間は有意であった(いずれも $p<.05$)。つまり、抵抗感は神経症傾向高群で有意に高い傾向があり、かつ友人・家族条件にくらべオンライン授業で高い事が示された。

外向性についても同様に図に示した(図 2)。また、エラーバーは標準偏差を示した。

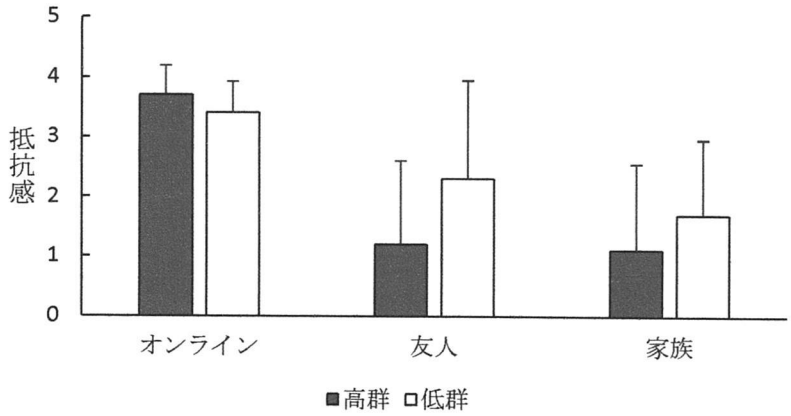

図 2 外向性の群ごとの条件による抵抗感

図 2 からオンライン条件では、外向性高群の方が抵抗感が高かった。しかし、友人条件と家族条件では外向性低群の方が抵抗感が高かった。外向性高群は、オンライン条件がもっとも抵抗感を高く、友人条件と家族条件は大きな差は見られなかった。外向性低群は、オンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件よりも家族条件の方が抵抗感が低くなった。

同様に分散分析を行った結果、群の主効果は有意ではなかった($F(1,18)=1.29$, *n.s.*)。条件の主効果は有意であった($F(2,36)=28.41, p<.01$)。群×条件の交互作用は有意傾向であった($F(2,36)=2.69, p<.10$)。条件の主効果が有意であったため Holm 法による多重比較を行ったところ、オンライン条件と友人条件・家族条件との間は有意であった(いずれも $p<.05$)。交互作用が有意であったため、下位分析を行った。その結果、群の単純主効果は、いずれにおいても有意ではなく、条件の単純主効果はどちらの群でも有意であった($ps<.01$)。群別の多重比較の結果、どちらの群においてもオンライン条件が友人条件・家族条件より有意であった。つまり、抵抗感は友人・家族条件にくらべオンライン授業で高い事が示された。

開放性についても同様に図に示した(図 3)。また、エラーバーは標準偏差を示した。

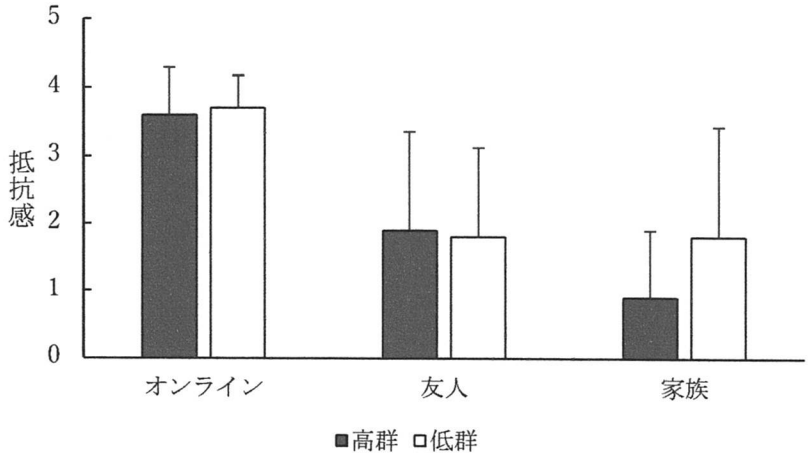

図 3 開放性の群ごとの条件による抵抗感

図 3 から友人条件では開放性高群・低群に違いは見られなかった。オンライン・家族条件では開放性低群の方が抵抗感が高かった。開放性高群は、オンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件よりも家族条件の方が抵抗感が低くなった。開放性低群はオンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件と家族条件に大きな差は見られなかった。

同様に分散分析を行った結果、群の主効果は有意ではなかった($F(1,18)=0.73$, *n.s.*)。条件の主効果は有意であった($F(2,36)=26.34$, $p<.01$)。群×条件の交互作用は有意ではなかった($F(2,36)=1.26$, *n.s.*)。条件の主効果が有意であったため Holm 法による多重比較を行ったところ、オンライン条件と友人条件・家族条件との間は有意であった(いずれも $ps<.05$)。つまり、抵抗感は友人・家族条件にくらべオンライン授業で高い事が示された。

調和性についても同様に図に示した(図 4)。また、エラーバーは標準偏差を示した。

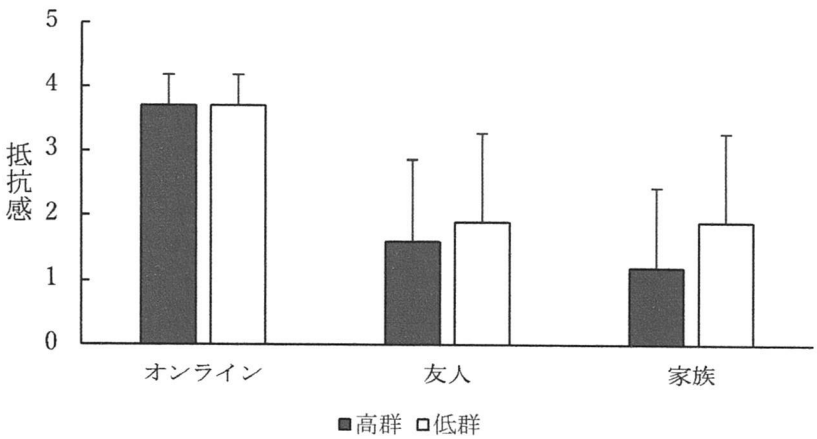

図 4 調和性の群ごとの条件による抵抗感

図4から、オンライン条件では違いは見られなかった。友人・家族条件では調和性低群の方が抵抗感が高かった。調和性高群は、オンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件よりも家族条件の方が抵抗感が低くなった。調和性低群は、オンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件と家族条件に大きな差は見られなかった。

同様に分散分析を行った結果、群の主効果は有意ではなかった($F(1,18)=0.84, n.s.$)。条件の主効果は有意であった($F(2,36)=33.49, p<.01$)。群×条件の交互作用は有意ではなかった($F(2,36)=0.73, n.s.$)。条件の主効果が有意であったため Holm 法による多重比較を行ったところ、オンライン条件と友人条件・家族条件との間は有意であった(いずれも $ps<.05$)。つまり、抵抗感は友人・家族条件にくらべオンライン授業で高い事が示された。

誠実性についても同様に図に示した (図5)。また、エラーバーは標準偏差を示した。

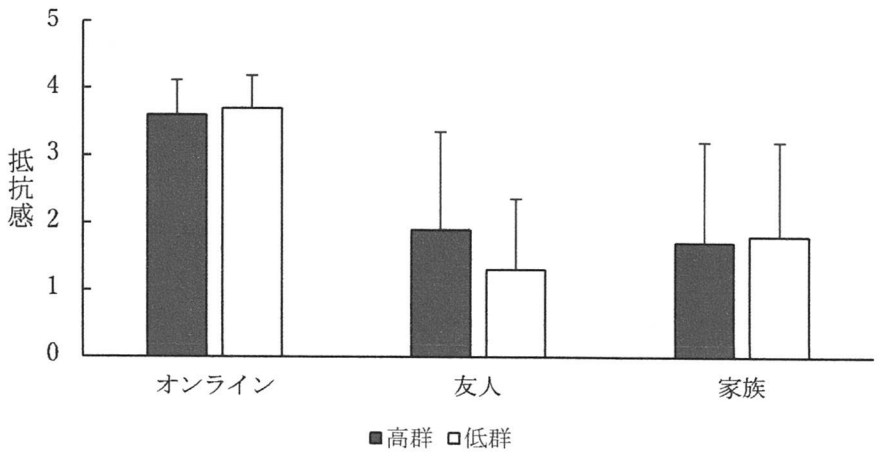

図5 誠実性の群ごとの条件による抵抗感

図5から、オンライン条件、家族条件では高群・低群の間に違いは見られなかった。友人条件では誠実性高群の方が抵抗感が高かった。誠実性高群は、オンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件と家族条件に大きな差は見られなかった。誠実性低群は、オンライン条件がもっとも抵抗感が高く、家族条件よりも友人条件の方が抵抗感が低くなった。

同様に分散分析を行った結果、群の主効果は有意ではなかった($F(1,18)=0.17, n.s.$)。条件の主効果は有意であった($F(2,36)=21.63, p<.01$)。群×条件の交互作用は有意ではなかった($F(2,36)=0.68, n.s.$)。条件の主効果が有意であったため Holm 法による多重比較を行ったところ、オンライン条件と友人条件・家族条件との間は有意であった(いずれも $ps<.05$)。つまり、抵抗感は友人・家族条件にくらべオンライン授業で高い事が示された。

内省報告については表2にまとめた。

表2. 各条件の内省報告

オンライン条件
変な顔を見られるのではないかと極度に不安になるから
家族とは違い、部屋など自分の見せたくないものが映る可能性があるため
授業に出席している人全員に自分の顔を見られるのが恥ずかしいからです。
顔はいつもみられているので
外に出ないのにも関わらず、身だしなみに気をつけないといけないから
不特定多数の人に顔を見られるのに抵抗感を感じる。他の人の視線が気になる。
わざわざメイクをしないといけないから。
いつもと環境が違うとそれだけで少し億劫になるから。
友人条件
心を許しているから
普段から顔をあわせおり、部屋等も知られているため抵抗なし
自分の顔を見られることに抵抗感がある。
むしろ友達とは顔を見ながら会話したい
普段から顔をあわせおり、部屋等も知られているため抵抗なし
やったことがあるから。むしろ話す機会が増えるのでやりたい。
友人なのだから、顔を出すのに抵抗を感じない。
友達でも少し恥ずかしいから
家族条件
悩みを打ち明けられるなど、信頼しているから
嫌いだから。
家族とは仲がよくビデオ通話をたまにするため抵抗感はない。
普段から顔を合わせて会話しているから電波を隔ててもなにも思わない
家族だから
いつも会っているから抵抗感がない
仲良くない
親しい仲だから

考察

本研究の目的は、オンラインコミュニケーションおける抵抗感に対して性格が及ぼす影響について検討するものであった。本研究では、性格特性を NEO FFI を用いて測定を行った。抵抗感に対しては場面想定法を用いて 5 件法で回答してもらい、なぜそう感じるかを自由記述で回答してもらった。得られた結果から平均値と標準偏差を算出し、各性格特性の高群 10 名と低群 10 名の比較を行った。

【神経症傾向】

神経症傾向では、神経症傾向高群の方がどの条件においても抵抗感が高かった。これは、慣れない連絡の仕方や授業に対する不安や心配が高群の方がより顕著になるからではないかと考えられる。なぜなら、中間(2020)によると、神経症傾向とは、抑うつ、不安、心配、傷つき、怒りといった感情の不安定性を示す。オンライン条件の高群の内省報告では、「変な顔を見られるのではないかと極度の不安になるから」、「家族とは違い、部屋など自分の見せたくないものが映る可能性があるため」などの不安や心配の内省報告があった。それに対して、低群の内省報告では「外に出ないのにも関わらず、身だしなみに気を付けないといけないから」、「顔はいつもみられているので。」などの不安や心配とは別の

内省報告があった。そのため、慣れない連絡の仕方や授業に対する不安や心配が高群の方がより顕著になるからではないかと考えられる。友人条件・家族条件においては親しい間柄になるため多少の不安や心配といった感情はあるがオンライン条件と比べると抑制されたのではないかと考えられる。友人条件の内省報告では、「心を許しているから。」、「自分の顔を見られることに抵抗感がある。」といった内省報告があった。家族条件の内省報告では、「家族間なら友人よりも緊張せずに何でも話せるから。」、「悩みを打ち明けられるなど、信頼しているから。」といった内省報告があった。以上の事から友人条件・家族条件においては親しい間柄になるため多少の不安や心配といった感情はあるがオンライン条件と比べると抑制されたのではないかと考えられる。

【外向性】

外向性では、外向性高群はオンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件と家族条件では外向性低群の抵抗感が高かった。オンライン条件において外向性高群の方が抵抗感が高かったのは、自分の姿を他者の目に晒すため身だしなみや会話などに気を使ってしまうからだと考えらえる。なぜなら、水野(2003)では、他者との間に好意的感情が生まれるかどうかは自分から他者に対してどのような行動を取るかが強く影響していると述べられている。その行動を社会的スキルと言い、社会的スキルと外向性は強く関係しているとされる(水野 1997)。そして、内省報告では、「わざわざメイクをしないといけないから」、「外に出ないのにも関わらず、身だしなみに気を付けないといけないから」があった。以上の事から相手に不快な思いをさせないため気を使ってしまうからではないかと考えられる。友人条件・家族条件においては、気をあまり使わなくてもよい親しい間柄になるため外向性高群の方が抵抗感が低いのではないかと考えられる。

【開放性】

開放性では、開放性低群はオンライン条件がもっとも抵抗感が高く、友人条件と家族条件に大きな差は見られなかった。オンライン・家族条件では開放性低群の方が抵抗感が高かった。群の効果は明確ではなかったことから、開放性は抵抗感に影響を及ぼしていないと考えられる。しかし、オンライン・家族条件において開放性低群の値が高いように見えた。中間(2020)によると開放性の低さは、伝統や秩序を重んじる傾向がある。そのため、開放性低群の参加者は、対象や状況に関係なく、オンラインコミュニケーション全般に否定的または抵抗感を感じやすいのではないかと考えられる。

【調和性】

調和性では、オンライン条件では違いは見られなかった。友人・家族条件では調和性低群の方が抵抗感が高かった。群の効果が明確ではなかったことから、調和性も協調性と同様に抵抗感に影響を及ぼしていないと考えられる。しかし、内省報告には、家族の仲が良くないと見受けられるものがあった。そのため、調和性の低い個人は、相手が友人や家族であっても、コミュニケーションに抵抗感を感じやすいのではないかと考えられる。

【誠実性】

誠実性では、オンライン条件、家族条件では高群・低群の間に違いは見られなかった。友人条件では誠実性高群の方が抵抗感が高かった。群の効果は明確ではなかった。中間(2020)では、誠実性では、計画を立てて物事に集中して取り組む傾向があると述べられている。そのため、コミュニケーションなどには影響を及ぼしていないと考えられるため、オンラインコミュニケーションに対しても影響をあまり及ぼしていないのではないかと考えられる。なぜなら、水野(2004)の結果から社会的スキルの関係性の低さや加藤(2001)の結果から人間関係で生じたストレスフルなイベントに対する対人ストレスコーピングの影響が弱いことから誠実性は影響をあまり及ぼしていないのではないかと考えられる。

【まとめ】

今回の実験結果から、神経症傾向と外向性は、オンラインコミュニケーションに対して抵抗感を与える一因になっていることがわかった。神経症傾向が高い人は、家族であってもビデオ通話に対して抵抗感を感じやすいことが考えられた。外向性が高い人は、オンライン授業では抵抗感が強くなる結果になった。これは、不特定多数の他者の目に自身の姿が晒されるため身だしなみや会話などに気を使ってしまうからだと考えらえた。しかし、抵抗感が及ぼしている影響は性格からだけでなく他の要因も影響していると考えられる。なぜなら、狩野(2020)の結果からオンラインコミュニケーションは対面より非言語的違和感があるといった結果がある。以上の事から、性格だけでなく他の要因も考えられる。

今回は場面想定法を用いた質問紙を行ったが今後は、実際に対面での会話・ビデオ通話での会話を行ってもらい性格検査と抵抗感の有無、内省報告を回答してもらい同様の結果が得られるかを調査すべきだと考えられる。さらに、今回は単一の性格から考察をしたが性格同士の相関関係も調べるべきであると考えられる。

引用文献

畑野快(2010).青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性 教育心理学研究 58,404-413

藤本学・大坊郁夫(2007).コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究 15(3),347-361.

狩野繭姫・布井雅人(2020).直接対面とビデオ通話における日常的コミュニケーションの評価の違いーLINE のビデオ通話機能を用いた検討ー聖泉論叢 28,105-116.

加藤司(2001).対人ストレスコーピングと BigFive との関連性について 性格心理学研究 9(2),140-141.

水野邦夫(1997).対人関係における外向性の直接的効果について 聖泉論叢 5,63-75.

水野邦夫(2003).対人場面における好意的感情と外交性の関連性についてー外向性は「好ましい性格」か？ー聖泉論叢 11,13-25.

水野邦夫(2004). 良好な対人関係に及ぼす性格特性・社会的スキルの効果について--自己評定データをもとに 聖泉論叢 12,17-27.

内閣府(2020). https://www5.cao.go.jp/keizai2/keizai-syakai/future2/20210119/shiryou3-1.pdf#page=4

中間玲子(2020).感情・人格心理学ー「その人らしさ」をかたちづくるものー ミネルヴァ書房

下仲順子・中里克治・権藤康之・高山緑(2011).NEOFFI 人格検査(成人用) 東京心理株式会社